

だ だりきどう 百々力童

(石 浜)

むかし、石浜が、片葩の里と呼ばれていたころ、そこから明德寺川をへだてて、緒川村へ渡し舟が出ていました。渡し守の長四郎さん夫婦には、子供がなくて、毎日さみしい思いをしておりました。

ある日のことでした。長四郎さんが、緒川村へ人を渡して引き返してくる途中、雷をともした大夕立に見まわれました。長四郎さんが、大急ぎで舟を岸に着けようとしていますと、「ガラガラ、ピシヤ。」



と大きな音がしたかと思うと、突然、舟の中へ

かみなり
雷かみなりが落ちてきました。

びつくりした長四郎さんが、かいを振り上げ

てなぐりつけようとしていますと、

「助けてくれ。助けてくれたら子供を授ける。」

と言います。

「ほんとか。」

「ほんとだ。立派な子供を授けてやろう。その

かわり、楠で舟をつくり、その中に水を入れ

て、竹の葉を浮かべてくれ。」

と、必死になつてたのみます。長四郎さんが言わ

れたとおりにしますと、雷は、大変喜び、何度

もお礼を言うと、その舟に乗って天へ帰って行
きました。

それから数か月が過ぎて、ほんとうに長四郎

さん夫婦に元気な男の子が授かりました。雷神

の授かり子らしく、首に蛇を巻きつけておりま

した。長四郎さん夫婦は、この雷神の申し子を

大切に育てました。

この子は、大きくなるにつれて力が強くなり、

十歳くらいのころには、二メートル四方もある

大石を軽々と差し上げ、それを十メートル以上

も、ほうり投げるほどの力持ちになりました。投

げる時ときに足あしをふんばった地面じめんが、十センチもめり込んで、大きな足型が出来たといひますから、それは大変な力ちからだったのでしよう。

この怪力かいりきのうわさが天皇てんのうの耳みみにも達たつし、ついに宮中きゆうちゆうのお抱え力士かかとして召し出され、「百々だだ力童りきどう」の名をたまわりました。それから、小さい子が、足をどんどん踏み鳴らしてむずがり、大人おとなを負かしてしまふことを「百々だだを踏む」と言いうようになったといふことです。